

ナショナル化に呑み込まれるエスニシティ： クメール人とは誰か？

村嶋英治[†]

The Impact of Nationalization on Ethnicity: Who are the Khmer?

Eiji Murashima

This article attempts (1) to shed light on the actual condition of Khmernization of ethnic minorities, ethnic Chinese and ethnic Lao in Cambodia; (2) to compare this situation with the Thaification of ethnic Khmer in Northeast Thailand; and (3) to examine the nationalization which has been making rapid inroads among the ethnic minorities of Cambodia and Thailand.

In this article, “nationalization” refers not only to the intensification of ethnic minorities’ identity within nation-states, but also to the promotion of the assimilation of ethnic minorities into a dominant or central language and culture, either voluntarily or by force. Needless to say, the phenomenon of unification of languages and cultures is not limited to ethnic minorities. Currently in many countries in Southeast Asia, there is a powerful trend for central authority to dominate local regions, and as a result cultural differences are gradually disappearing. In other words, central languages and cultures are taking over local dialects and unique minority cultures. People tend to focus primarily on “globalization” in Southeast Asia nowadays; however, a more powerful trend is the unification phenomenon often referred to as “centralization” or “nationalization” (or “Bangkoknization” or “Phnom Phenization”). In this article “nationalization” refers to such centralization.

Noteworthy points in this article are as follows: first, this study uses new materials which were collected during a brief study tour to investigate the current status of the ethnic minorities who are subject to the big waves of nationalization. Second, the ethnic minorities which were the subject of the research, were not minimal, landless ethnic minorities, but main ethnic, territory-owning groups in the Southeast Asian mainland: ethnic Lao and ethnic Khmer. Some of them were forcibly separated by the demarcation of borders, and were forced to live as members of a neighboring country dominated by a different ethnic group. This article attempts to clarify how those people, who became ethnic minorities in neighboring countries, have been experiencing the process of nationalization during the past half century, either by compulsion or of their own free will. Third, cases from several countries in the mainland of Southeast are compared. Fourth, unique and complex situations, such as that of the Lao surrounded by the Khmer in Cambodia and the Khmer surrounded by Thainized Lao in Thailand, are compared, and they are also compared with the assimilation of ethnic Chinese, who play significant roles in both countries.

This article begins by focusing on the actual condition of ethnic Chinese in Cambodia, a group who have an important and distinct position in both Cambodia and Thailand. It can be said that the degree and form of their nationalization is more advanced than that of ethnic Lao in Cambodia and

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授 murashim@waseda.jp

ethnic Khmer in Thailand. While ethnic Chinese were originally immigrants, ethnic Lao in Cambodia and ethnic Khmer in Thailand are natives of the regions where they now live. However, in the process of assimilation, in both cases examined here, the severe racial confrontation among races that could be seen in other regions, did not take place. The Lao's Khmernization and the Khmer's Thaification unfolded spontaneously and peacefully, in particular in the later stages, just like ethnic Chinese's Khmernization or Thaification. Thus this smooth transition could be seen as a characteristic of the nationalization of ethnic minorities in mainland Southeast Asia.

The second paragraph focuses on the Khmernization of ethnic Lao in Stung Treng, Cambodia. The third paragraph deals with the Thaification of ethnic Khmer in Surin, northeast Thailand. In the fourth paragraph, the Cambodians' perception of Thailand and Viet Nam are discussed.

The ethnic Lao in Cambodia and the ethnic Khmer in northeast Thailand have been involved in powerful surges of nationalization, and, rather than resisting it, they take on their Khmernization or Thaification spontaneously. This is the same process experienced by ethnic Chinese in an earlier time. That is to say, original ethnic minorities in both countries spontaneously abandoned their own language to be nationalized in the same way as the ethnic Chinese. In the second half of the 20th century, nationalization has been swallowing the languages and cultures of ethnic minorities, and ethnic diversity is indeed on the verge of extinction.

はじめに

筆者は、これまでタイの国民統合をテーマとした論文を何本か物したことがある¹。それらで用いた資料は、主に中央の政策決定者側の資料であった。統合の対象とされた少数民族側において、統合政策の過程で何が生じたかについては、調査したいという希望は有していたものの、調査に赴くまでには至らなかった。

ところが、2003年8月にカンボジアを訪問²し、カンボジアの仏教をタイの仏教と比較する機会を得た。同じ上座部仏教とはいえ、細部には様々な違いが存在することに興味をそそられた³。さらに、ストゥントレンに、カンボジアにおける少数民族、エスニック・ラーオを訪ね、彼らの言語や文化が急速にクメール化しつつある現状を見聞した。この見聞から、東北タイに住むクメール人たちの文化は果たしてカンボジアのそれと同一なのだろうか、また、彼らのタイ化の実態・程度は如何ということに、強い興味が生じたのである。このような関心をもって、同年8月末に短期間ながら、東北タイ（イサーン）のスリン県にエスニック・クメールを訪ねた。そこでは、クメールのタイ化を目撃した。

さらに2003年12月には、再度カンボジアを訪問することができた。2回目のカンボジア訪問は、早稲田大学アジア太平洋研究科入学を志望しているカンボジア人青年男女10名に二日がかりの面接をするためであった。面接および大学・役所訪問で、タイ社会のタイ化した華人と同様に、カンボジア社会でもクメール化した華人がエリート・中間層として大きな比重を占めていること、また、彼らがタイ・ベトナムに対して強い敵愾心を有することについて具体的な知識を得ることができた。

本稿は、以上の調査見聞を主な資料として、①カンボジアにおける少数民族である中国系やラーオ系の住民のクメール化の実態を明らかにし、②これを、カンボジアにおけるとは正反対にタイでは少数民族の立場にある、東北タイのクメール人のタイ化と比較し、③これらによって東南アジア大陸部で急速に進行しているナショナル化を明らかにしようと試みるものである。

本稿にいうナショナル化とは、少数民族の国民国家に対する所属意識一体化意識が強化されることのみならず、彼らが中央の、あるいは支配的な言語や文化に強制的・自発的に同化を進めることをも指している。もちろん、言語・文化面の単一化は、少数民族に限った現象ではない。現在、東南アジア大陸部各国では、中央から発する強大な潮流に、地方は呑み込まれ、文化的差異は次第に失われつつある。地方の方言や独自の習慣伝統は、中央の言葉や文化に取って代わられつつある⁴。東南アジアでは「グローバル化」だけに注目が集まる傾向があるが、それ以上に強力な潮流は「中央化」、「全国化」（あるいは「バンコク化」、「プノンペン化」）と称すべき単一化現象であろう。本稿にいうナショナル化は、このような中央化、全国化と軌を一にし、重なり合っている。

本稿にいくらか新しさがあるとすれば、次のような点を挙げることができよう。一つは、ナショナル化の大波を受けつつある、少数民族側の実態を短期間ながら足で歩いて調査して収集した新たな資料を用いていること。二つは、対象とした民族が、少数民族とはいっても、どこにも自らの国をもたない本来の少数民族ではなく、東南アジア大陸部の主要民族であり、自らの国家を有するエスニック・ラーオとエスニック・クメールであることである。彼らの一部は、自らの与り知らぬ国境画定で分離され、異なる民族が大部分を占める隣国の国民として生きることを強制された。本稿は、隣国の少数者となった彼らが、過去半世紀においてどのように強制的、自発的なナショナル化の道をたどったかを明らかにしようとしている。三つ目としては、東南アジア大陸部に位置する複数の国における事例を比較していること、四つ目としては、カンボジアでは、クメールに囲まれたラーオ、タイでは逆に、タイ国民であるというアイデンティティを内面化したラーオ人（イサーン人）に囲まれたクメールを取り上げるという、取り合わせの妙のみならず、彼らを両国で共通に重要な役割を有する華人の同化と対比していることである。

本稿は、第1節において、まず、カンボジア、タイ両社会で重要かつ特異な地位を占めているエスニックグループ、華人の実態を、カンボジアに関して見てみたい⁵。彼らのナショナル化の程度・形態は、カンボジアのラーオ、タイのクメール、両者のナショナル化を先取りしたものということができる。華僑は外来の移民者であり、一方、カンボジアのラーオやタイのクメールは本来の原住民である。しかし、前者の同化過程と同様に、後者の同化過程でも、他の地域に見るような民族間の激しい対立は生じなかった。後者は、言語文化を共にする集団が構成する隣接の国家との自己同一化に強い執着を示さなかった。ラーオのクメール化やクメールのタイ化は、とりわけその後期においては、華僑のクメール化あるいはタイ化と同様に自発的平和的に進行した。これは東南アジア大陸部における少数民族のナショナル化の特徴として指摘することが可能であろう。続いて、第2節では、ストゥントレンのエスニック・ラーオのクメール化を、第3節では、スリンのエスニック・クメールのタイ化を扱う。第4節は、カンボジア人の対タイ、ベトナム認識および両国に住むエスニック・クメールに対する認識について述べたい。ここからは、カンボジアに見られる、強力なナショナル化志向の背景・源泉を窺うことができる。

1. カンボジアにおける濃厚な華僑の血統と同化の現状

2003年12月の早大留学希望者への上述の面接は、10名（男性8名、女性2名）の対象者を二日に分けて実施した。面接対象者の生年は、1972、73、74、76、79、80、82年である。1980年生が4名いるが、それ以外の年は1名ずつである。

衝撃的なのは、10名の面接対象者のうち、父親をクメール・ルージュ（ポルポト派）に殺された人が5名にも上ることである。なかでも1972年から76年の間に生まれた人は、4名全員が父親を殺されている。（最後に父親を殺された人は、80年生）。殺害された父親たちの職業は、官営工場のマネージャー、高校の数学教師、医師、フランス留学経験のある国家公務員などである。一方、母親を殺されたという人はいなかった。これは、カンボジア社会では隣国タイと比しても、女性が社会的に進出していなかったことと関連があるであろう。今回の面接でも、母親は主婦（housewife）という答えが多かった。一方、生存している5名の父親の職業は、プノンペンの国家公務員（2名）に、カンダル省の建設資材商人、カンダル省の農民、コンボンチャム省の教員が各1名である。

面接対象者の10名は、全員が大卒である。出身大学は、王立プノンペン大学（Royal University of Phnom Penh）卒業者が7名。この内、心理学科卒業者1名を除く6名は外国語学部（Institute of Foreign Languages）英語科卒である。他に王立芸術大学卒1名、国立経営大学卒1名、英語教育に力を入れている私立ノートン大学卒が1名である。彼らの現職は、国立大学講師2名（王立プノンペン大学、王立法経大学各1名）、国家公務員3名、国際NGO職員2名、民間新聞社勤務（英文翻訳担当）1名、外資系保険会社1名、学生1名である。

1人の国家公務員を除いた8名の有職者の平均月収は、350米ドルである。国際NGOの職員2名は月給だけで、400～500ドルを得ている。それ以外の者は主収入源を、本職からではなく、本職以外の収入に依存している者が多い。たとえば、2名の大学講師、1名の上院に勤務する国家公務員、それに民間新聞社勤務者の計4名は、英語の特別授業を担当してアルバイト収入を得ている。例えばこのうちの一人の大学講師の月給は30ドルだが、別に私費学生コースを教えて月250ドルの所得を得ている。上院に勤務する公務員は、120ドルの月給の他に、王立法経大学の夜間コースで英語を教えて200ドルの収入を得ている。民間新聞社勤務者の月給は150ドルであるが、夜学で英語を教えて同額の副収入を得ている。

面接対象者10名全員に、中国人の血が入っていた。タイ人の多くに、中国人の血が入っていることは十分承知していたが、隣国カンボジアでも、事情は同じらしい。

面接した10名全員が父方（7人）もしくは母方（2人）に、あるいは双方（1人）に中国人の血が入っている。中国移民の3代目という者が多い。先祖の出身地は潮州が2名、福建が2名。他の6名は、先祖の出身地を知らない。中国語を学んだことがある者は、2名。この他に、少し中国語ができる者が、1名いるだけである。しかし、彼らのうち少なくとも7名は、清明節などの中国の習慣を維持している。カンボジアの中国系の人々は、タイの中国系住民以上に中国文化を維持しているかもしれない。

面接した10人に限らず、今回訪問した大学や官庁で会った人の多くは、一見中国系であった。王立プノンペン大学学長 Pit Chamnan 氏は、筆者が2003年8月にインタビューしたポルポト体制ナン

バー・ツのヌオン・チア (Nuon Chea) 氏⁶そっくりで、色白の中国系顔。教育青年スポーツ省次官の 1 人（連立与党の主要メンバーである二党が、それぞれ次官を出している。彼は人民党出身の次官）Im Sethy 氏の顔も、タイのチュラーロンコーン大学の某元政治学部長とうり二つの中国顔。王立法経大学 (Royal University of Laws and Economics) の学長 Yuok Ngoy 氏（1980 年代に 87 年まで同校で実施された、ベトナム人教員によるベトナム語授業で、計画経済を学んだ）も中国顔。同大学で教えている四本健二・名古屋経済大学助教授によれば、同校の 6000 人の学生の殆どには中国人の血が入っているとのことであった。カンボジア事情の専門家である某外交官によれば、カンボジアの華人の 7 割は潮州系であるが、ポルポト時代に都市の潮州系華人を地方に追いやったために、華人と地方クメール人の結婚が生じ、クメール人と中国人との混血化は一層進んだ由である。

以上から見て、ヌオン・チアがカンボジア指導者として、中国系 3 世（劉姓、バタンバン出身）であることは例外ではなく、むしろ普通のことであることが判る。地方に住むカンボジア華人には農業従事者も少なくないようである。面接をした一青年の両親は中国系で、カンダルで農業を営んでいた。ヌオン・チアの親も、バタンバン郊外で商売を営みながら農耕もしていたという。ポルポト体制の特異性は、中国系住民をも大量に殺害したことである。父親を殺された面接者の 1 人は、ポルポト派は中国の援助を受けながらも、中国系住民を殺害したと語っていた。しかも、中国系かどうかを判定する根拠は、ただ顔の色や形が中国人に近いかどうかという、極めて杜撰なものであったようだ。

10 名の面接対象者の中には、中国の姓をそのままファミリーネームとして用いている者 (Heng や Cheang など) もいれば、中国語の名前をカンボジア名としている者もいた。カンボジアの現外務大臣 Hor Namhong の姓名は、中国名をそのまま使用したものとのことであるし、また、Royal University of Fine Arts の考古学教授 Dr. Ang Choulean も同様である由である。タイではタイ籍を取得した場合はタイ風に姓名に変えることが求められるが、カンボジアでは、その必要はないのである⁷。これは、カンボジア人の氏名自体が、姓が先、名が後で中国人と同じ順序のうえ、単音節で中国語と似ているためであろうか。たとえば、Cheang Sok Kea という姓名の場合、彼のファミリーネームの Cheang は中国の姓をそのまま使用し、ミドルネームの Sok はクメール語、名前の Kea は中国語である。カンボジアでは通常の呼称には、最後の名前の部分のみを用いる。同じ単音節で中国語かクメール語かは見分けが困難に見えるが、カンボジア人には、すぐに判別できるとのことである。面接から判ったことは、カンボジア人の姓の多くは、祖父の名前に由来していることである。祖父の名が姓になったのであるから、ある単語は名としても姓としても用いることができる。例えば、「国家」を意味する Ratha もしくは Rath という語は、名としても姓としても用いられている。

カンボジアはインドネシアにおける 1998 年 5 月の反華僑暴動時に、インドネシアを脱出した華僑多数を受け入れた国として知られる。現在でも、同国は中国人が移民として入国する場合に、最も障壁の少ない国のようなのである。バンコクでタイ航空に勤務している友人（中国系二世、中国語可）の話によると、中国からビザなしでバンコクまで飛んできた中国人に、中国に帰国するか、到着地でビザを取得できるカンボジアに行くかを質問すると、多くはカンボジア行きを選択するそうである。このように新中国人の流入が多いためか、プノンペンの中国系書店の中国語図書は、バンコクのそれよりも充実してい

る。

プノンペン以外の地方でも、中国系人口は少なくない。バットンバンやクラチエなどの地方都市を2003年8月に訪問した時、中国人学校が目についた。バットンバン省における仏教教育の最高学府(中等レベル)が置かれ、かつ、同省のモハーニカーイ派の全僧侶を統括する省僧長(Mekhun)が住む Pov-eal 寺、すなわち、同省の上座部仏教の中心寺においても、漢字が記された中国人の墓、廟、建物が多数見られた。同じく8月に、ストゥントレン省庁所在近くのスラ・ルセイ村(Khum Srah Russiy)の村長(MeKhum, 英語では Commune Head, タイのガムナンに相当) Pan La (61歳)氏に、同村の人口構成を尋ねたところ、同村の全人口は3963人(723世帯)で、その中、カンボジア国籍の華人は128人(22世帯)、同じくカンボジア国籍のベトナム人は32名(6世帯)、残りはクメール人が3803人(695世帯)という答えが返ってきた⁸。プノンペンを早朝、車で発って北に車行1時間余のコンボンチャムで、午前7時過ぎに一日一便のストゥントレン行き快速船に乗り換え、メコン河を遡航すること8時間でストゥントレンに到着する。ラオス国境の僻地に位置する同省の全人口は、12万人に過ぎないが、このような所にも、中国系の人々が少なからず生活していることが判った。

2. カンボジアのラーオ人のクメール化

ところで、上述の人口統計については、もう一つ注意を要することがある。クメール人3803名と称しているが、その多くは、エスニックにはラーオ人(クメール語でリャオ)なのである。Pan La 村長自身もラーオ人であるが、カンボジアの統計では、エスニック・ラーオはクメール人として分類されるようである。ストゥントレン(Stung Treng はクメール語で、Stung は川、Treng は芦に似た植物の由である。同地のラーオ語の地名は、Siang Taeng。Siang は、沙弥出家経験のある男性への敬称、Taeng は瓜の由)の住民は元来ラーオ人で、クメール人が多数移動してきたのは、1979年以降とのことである。新参のクメール人はお役人とその家族(役人の妻の多くは、市場で小商いをしている)か、コンボンチャムなど河下の人口の多い地域から来た小商人や失業者である⁹。それ故、同省のモハーニカーイ派¹⁰ 省僧長(Mekhun)、Nou Thorngnak 和尚の住むスラケーオ・ムニーワン(Sraskev Mounywann)寺(同寺には1897年建造のサーラー棟が現存)には、45名の僧侶・沙弥(大部分は若い沙弥)がいるが、プノンペンからクメール語の教師として招いた一名の青年僧 Maha Ma Lam Thon (26歳、バットンバン出身、在タイ歴3年)を除けば、全てラーオ人であることは納得できる。色白の85歳の省僧長は、東北タイの著名な「森の僧」(プラ・パー)である故テート師の風貌そのものである。Maha Ma Lam Thon は、この寺の中では全てラーオ語が使われているので、何の話をしているのか理解できず、困るとこぼしていた。

しかし、ストゥントレンにおいてもラーオの言語・文化・伝統は今やクメール化の流れの前に風前の灯である。ラーオ文化維持の中心となるはずのスラケーオ・ムニーワン寺においても、タム文字(ラオス、北タイで仏典を記すために用いた文字)の貝葉を読むことができる僧は、もはや老僧2人しか残っていない¹¹。しかも、古いラオス文字で印刷された仏典やタム文字の貝葉も、ポルポト時代に破壊され、僅かしか遺されていない。

ストゥントレン省では、仏教寺院でのラーオ語教育が禁止されてから、すでに50年に近い。Pan La 村長によると、この地でも、1956年まではラオスで使用されている教科書と同一のものを扱い、寺院付設の6年制小学校で僧侶(Khu Ba)がラーオ語の読み書きを教えていた。小さなストゥントレンの町にも、当時はラーオ語教育を行う寺院が4寺も存在した。今ではラーオ語よりもクメール語の方が上手だという、1942年生の同村長自身も、小学校6年までラオスと同一の教科書を寺院の学校で学んだ。同村長によると、1953年にカンボジアが独立する前までの、仏領インドシナ時代にストゥントレンで流通していた紙幣には、ベトナム人、クメール人、ラーオ人の姿が描かれており、3者は平等の扱いであり、ラーオ語教育も自由であった。ところがカンボジア独立後、1956年に政府は、寺でのラーオ語教育を厳禁した。そのみならず、町の中でラーオ語を使用しているのが、警察に見つかり25リエルの罰金まで課されたという。それ以降、学校の教授言語はクメール語のみとなった。今日、ラーオ語の読み書きができる人達は、1956年以前に教育を受けた50代後半以上の人だけとなっている。ポルポト時代には、ベトナム語を話すと言われたが、ラーオ語の使用にはそのような危険はなかった。カンボジア政府の外国語制限は、1979年のベトナム軍による解放後、撤廃されたという。現在、中国語学校が各地に開校されているので、ラーオ語学校も復活させることが可能ではないか、と同村長に質問したところ、答えは、中国人には力があるが、ラーオ系住民は政府に圧力をかけるだけの力がないので無理だろうということであった¹²。

ラオスとの交流は途絶えたわけではない。この地域のラーオ語は、河上にある南ラオスのチャンパーサク地方のラーオ語と基本的に同一で、チャンパーサク地方(中心はパクセ)に親族がいる者も多いようである。例えば、Pan La 村長は、叔父がパクセに住んでいるだけでなく、姉二人もポルポト時代にパクセに逃げて、同地に留まったままである。更に村長の妻の兄弟はウィエンチャンと米国にいるとのことである。また、省僧長の秘書役の僧も、チャンパーサクに伯父がおり、相互に往来していると語った。

ストゥントレン近くの本コン河岸にはチークの大木の並木が続いている。その並木に沿って同市内から飛行場方向に、北に上ると、ラーオ人だけの稲作農村が広がっている。農村のラーオ人にとって、学校で学ぶ言葉は、クメール語であっても日常生活はラーオ語である。また、結婚もエスニック・ラーオ間で行っており、クメール人との結婚はない、という。それ故、新しい世代はラーオ語の読み書きはできなくなったとはいえ、話し言葉としてのラーオ語はラーオ農村で今後も継承されるであろう。しかし、一旦農村を出ると、クメール語の世界である。カンボジアでは少数派であるラーオ系住民はクメール人に対して劣等感があるようである。クラチエの食堂で月給15ドルで働きながら近くの中華学校で英語を8カ月前から学び始めたという、ラーオ系住民の少女に遭った。彼女は、ラーオ出身であることが嫌だ、ラーオ語は話したくない、クメール語ができなければプノンペンに働きに行くこともできない、と語った。

3. 東北タイのクメール人のタイ化

比較のために、カンボジアのラーオ人と同様にナショナル化に直面している、タイ領のクメール人に

ついて見てみたい。東北タイのスリン、プリラム、シーサケート、ローイエットの4県には、多数のエスニック・クメールがエスニック・ラーオとともに、共住している。なかでも、スリン県におけるクメール系人口割合の大きさは、カンボジアのクメール人にもよく知られている。東北タイのクメール系の人々はクメール・スリンと称されることもある。

2003年8月にカンボジアからバンコクに戻って、スリン県にクメール人を訪ねた。スリンは、表面的にはタイの他の地方都市と何ら変わらない。市中の看板もメディアも全てタイ語である。タイ語で話せば、誰からもタイ語で返事が返ってくる。ここにタイ語と同じくらいに話されている言語がもう一つ存在しているとは思いつかないほどである。ところが、クメール語を話せば、スリンはクメール語の世界に一変するのである。今回の訪問には、筆者のゼミ生であった、カンボジア人留学生ペキニーさんも同行した。スリンの最上ホテル、トーンターリン・ホテルに到着するなり、彼女は誰彼となく話しかけクメール語が通じるかどうかを確かめた。驚いたことには、ホテルのフロント係やその他の従業員全員がクメール語を話すだけでなく、エスニック・クメールであったことである。

ペキニーさんによれば、この地域のクメール語はアンコールワットのあるシェムリアップ辺りのクメール語に近いという。しかし、この地域のクメール人がアンコール時代から連続と住み続けているかというところではないらしい。カンボジア側が自国の領土内にあると一年前から主張し始めたター・ミアン・トム遺跡のあるスリン県パノムドンラック支郡ター・ミアン村の道路の脇に、日本のお地蔵様よろしく、同村を開いた指導者ター・ミアン (Ta Miang) 像が立ち、祠に由来が記されている。タイ語で書かれた由来文によると、クメール人ター・ミアンがカンボジアから村民と共に、この地に移って来て、村を開いたのは1767年であるという。現在はスリン市からター・ミアン村まで快適な舗装道路が通じているが、同村は少し前までは国境の僻地であった。

この村にあるヒマワンバンポット寺の、全身入れ墨をした住職 (39歳) の話¹³では、ター・ミアン村にも、今ではラーオ人が住み着いているが、クメール系とラーオ系との間の通婚は少ないそうである。同寺の10名の出家者 (僧侶9, 沙弥1) 全員がエスニック・クメールであり、村の70歳以上の人は、タイ語を話せないという。ペキニーさんは住職を訪問してきたクメール語しか話せないという70歳代半ばの二老人と話して、同胞意識を刺激され感激していた。それでも、住職は、寺での説法は、クメール語よりもタイ語を使う方が多い、という。その理由は、クメールの若い世代は、タイ語がよく理解できるので困らないし、村のラーオ人にも判るように話すには、タイ語の方が便利だからだそうである。この寺で、クメール語だけを用いる行事は年2回だけだという。90日間の雨安居 (パンサー) の丁度半ばの日に行われる、功德を積むために僧に布施する行事 (サート・レック) と雨安居の明ける15日前から行われる未だ転生していない先祖の霊供養のために僧に布施する行事 (サート・ヤイもしくはブン・サート) がそれである。エスニック・クメールであるスリン県のサンガの長 (Chao Khana Changwat, カンボジアの Mekhun に相当)、トーンユ (Thongyu) 和尚 (サーラーローイ寺住職, 70歳) の話では、彼の寺でも50年ほど前まではクメール語で説法していた¹⁴、という。彼の寺はスリン市内にある県内最高格式の寺であるから、クメール語説法が比較的早く消滅したのは理解できる。しかし、元来は、クメール系の住民だけから成っていたカンボジア国境近くの僻地の村、ター・ミアンでもクメール語に

よる説法が消滅の危機に瀕しているのは驚きであった。

スリン地域とシェムリアップとの間には、今日でも交流がある。シェムリアップで会った80歳の省僧長 Puth Ponn 和尚（ゲーサラーラーム寺住職）は、20歳でプノンペンで出家（トアンマユット派）したのち、23歳の時、スリン県プラサート郡のクットトム寺（タマユット派）に2年間留まったことがある。彼によれば、当時はプラサート郡の年配の人はクメール語しかできなかった。彼は村の小学校でクメール語で授業をしたこともある¹⁵、という。

ポルポト時代以前は、国境は名のみで両国のクメール人は自由に往来していたという話をスリンでも聞いた。しかし、前出ター・ミアン村の国境まで行ってみると、現在でもポルポト時代以前とそれほど変わってはいないことが判る。遙かに天秤棒の如く緩やかにしなった Dong Rak（クメール語では、ドンレーク、天秤棒の意）山地を望む国境の高原には、ケナフやキャッサバの畑が広がっている。この畑で働いているのは、カンボジア側から毎朝越境して働きにくる日雇い労働者である。農業労働者として雇用する場合、タイ人なら一日100バーツ（約280円）以上の日給が必要だが、越境カンボジア人はその半額で済むそうである。また、カンボジア側からパスポートなしで入ってきた僧侶が、タイ側の寺で雨安居することも多らしい。但し、官憲に見つかれば出国を強制されるということだが。

ポルポト時代に越境が困難であったのは、国境には、クメール・ルージュから「国際的」（タイ語でサーコン）支援を得ていたタイ共産党の解放区が存在していたからであろう。

現在では、スリンのカープチョン郡の Kapcheong Immigration Point からタイ国籍者は20バーツ（約56円）を払えば容易にカンボジア領に入ることができる¹⁶。同ポイントからカンボジアに入るとすぐ正面にカジノ賭博場がある。同じようなカジノはカンボジア西部のパイリンの国境にもある。後者には立ち寄って見たが、カンボジア人は立ち入り禁止で、ピックアップで越境してきた、裸足にサンダル履き、上はシャツ一枚という出立ちのタイの庶民で賑わっていた。

このようにスリンでは、カンボジア側との間にヒトの移動や交流があり、国境を跨いだ親族もいるが、スリンのエスニック・クメールには、カンボジア国民になりたい、あるいはカンボジアに統合されたいと希望する政治運動は皆無なようである。タイ国籍をもつエスニック・クメール（クメール・スリン）にとってのカンボジアのイメージは、流血の内紛を繰り返して自滅しつつある国、責任ある指導者のいない危険な国、生活水準の劣悪な国というマイナスのものばかりのようである。カンボジア側の指導者も、スリンのクメール系住民にクメール民族意識が希薄なことは認識しているようである。1940年代末に、スリンのクメール・イサラクの活動にも関係したヌオン・チア氏は、筆者に次のように語った。タイ領内に住むクメール系の人々には、クメール民族意識がない。1940-50年代にカンボジアの独立解放運動（クメール・イサラク運動）に協力した在タイ・クメール系の人々も、私益を図る機会として独立運動を利用したに過ぎなかった。ところが、メコン河下流域のベトナムに住むクメール人（Khmer Krom、下クメール人）は、心からクメール人だ¹⁷、と。

クメール・ルージュが出家者に還俗を強制し、拒否する者は殺害した時代、スリン、ブリラム地区にはかなりのカンボジア僧が逃げ込んで来た。なかでも有名な僧は、現在84歳（1919年、バットバン生）のルアンプー・タンマランシー（Luang Pu ThammaRangsi）和尚である。彼は1974年当時バッタ

ンバンの Mong Russey 郡の郡サンガの長であったが、クメール・ルージュ軍が同郡に入る前日に、タイのアランヤプラテートに逃れた。彼がタイで頼った寺は、バンコクのラーチャ・シンコン寺。同寺の副住職は、バツタンバンで出家した後、1945年頃バンコクに移って来たクメール人の So Rot 師(82歳)である¹⁸。

タンマランシー師は在バツタンバン時代からタイ語の読み書きができた。タイに来て彼も各地で止観(カマターン)に励むとともに、瞑想の指導を行った。彼がスリン県タートゥム郡の小寺ワット・プラバート・パノムディン寺に落ち着いたのは、1983年6月である¹⁹。止観修行によって獲得した彼の呪力は名声を博し、近隣各地からそのパワーにあやかろうと、多数の人々が参詣・寄進に押し付けて来るようになった。信者の寄進によって、同寺は短期間のうちに巨大な寺院に成長した。今日同寺を訪ねると、大広間には、タンマランシー和尚から、茎束(Bai Mayom)で聖水をふりかけてもらうために、朝早くから、順番待ちをしている善男善女であふれている。彼の他にも、ポルポト時代にタイに逃れた僧で、呪力で著名な僧としては、ブリラム県のチョンラプラターン・ラーチャダムリ寺のルアンプー・リット和尚などがいる。

2001年からスリンの師範大学(ラーチャパット, Rajabhat Institute Surin)では、毎年、タイ政府の奨学金を得たカンボジア人留学生を受け入れており、2003年8月時点で9名のカンボジア人留学生(7名はカンボジア公務員、2名は民間人)が同大学に学んでいる²⁰。同大学に修士論文を提出したばかりという、在タイ8年のカンボジア人(現カンボジア観光省公務員)から話を聞いた²¹。彼の話では、スリンとブリラムの師範大学には、クメール語を教える講座が開設されている。スリンの方の講座は、2名の非常勤講師が担当している。2人とも東北タイ出身のエスニック・クメール(うち1人は県庁勤め)で、教えている発音も語彙も現代の標準クメール語ではなく古語の名残を留めているシェムリアップ方言である。一方、ブリラムの方がクメール研究では充実しており、そのクメール語教員は、現代クメール標準語を教えることができる²²、という。彼は、さらにコーラートの私立大で学んでいた時の経験を次のように語った。その私大にもエスニック・クメール出身の学生がいたが、この人は卒業する時まで自分がクメール系であることを明かさなかった。最後になって「自分もクメール系であなたが他の人とクメール語で話している内容は皆理解できていた」と彼に告白した。クメール系の学生はクメール語は劣った言葉であり、恥ずかしいものだと思っているので使おうとしない、と。

また、彼は伝聞した話として、1990年頃までスリンでは公共の場所でクメール語で話すと罰金を課せられていた、と語った。筆者らがスリンに到着した日の夜に乗ったサームローの車夫(クメール系)も、ペキニーさんがクメール語で話しかけると、クメール語を使うと罰金を取られると心配したそうである。これが事実ならカンボジアの独立後、ストゥントレンのラーオ人がラーオ語使用に罰金を課されたことと瓜二つである。そこで、スリン県のサンガの長であり、エスニック・クメールであるトーンユー(Thongyu)和尚(サーラーローイ寺住職)に、真偽をたずねてみた。70歳の和尚はタイ・サンガ教法試験の最高位、9段の数少ない合格者であり、3年間インドに留学して修士号を得たという学識僧である。和尚は、スリンでは警察官自体もクメール系であり、彼らもクメール語を話しているから、あり得ないことだ、と直ちに否定した²³。借り上げた車の運転手(後述)の話でも、スリンでは町の店主の

殆どは中国系だが、クメール語を話せないと商売にならないのでクメール語がうまく、また、スリン選出の国会議員はクメール系のセークサン・センプーム議員以外は、全員中国系だが、彼らは皆クメール語がうまく、選挙の際にクメール人の村では流暢なクメール語で演説している、とのことである。

しかし、下層のクメール系住民が公共の場所においてクメール語で話すことにある種の不安を持っていることは事実のようである。その原因を考えるに、国境を越えてカンボジア側から密入国してきた、タイ語を解さないクメール人の中には、クメール・ルージュや盗賊が多く含まれているからであろう。クメール・ルージュがカンボジア側国境地帯に盤踞していた1998年頃までは、彼らは越境してタイ領土内で共産主義運動への動員²⁴をしたり、食糧等徴発のために強盗行為を頻繁に働いたりした。今日でも越境犯罪は跡を絶たないとのことである。それ故、下層のエスニック・クメールは越境密入国者だと誤解されることをおそれて、他人に聞かれる所では、クメール語の使用を控えるのであろう。もう一つ考えられる理由は、1930年代末からピブーン首相下のタイ政府が、ラッタニヨム（新文化・新生活運動）として半ば強制的に実施したタイ語化政策の影響である。この時以来、公権力は学校や公共の場所でクメール語を話すことを悪いことと見なして来た²⁵。権力を恐れる人民は、爾来公共の場所で、クメール語を使用することに不安感を持っているのかもしれない。

スリンで借り上げた車の運転手 Thamniam Bunchu 氏は、34歳で、エスニック・クメールである。彼によれば、彼の親の世代、即ち現在60歳代半ば²⁶以上の人々は、タイ語を話すことができない。スリン市近郊の農村に生まれた彼は幼少時には、クメール語だけで育った。そのため小学校に入った時には、タイ語の簡単な日常会話さえ理解できなかった。たとえば、「食事する (kin khao)」というタイ語さえも知らなかったという。小学校に入って言葉の大きな壁を経験した彼のような、現在30-40歳代のクメール系の人々は、家庭で子供と努めてタイ語で会話している、という。これは、自分たちの世代が小学校に入学当初に味わった困難を子供の世代には繰り返させたくないという親心であるとともに、入学時からタイ人と同じように授業についていくことができ、学力を伸ばすことができるようにという配慮からでもある。

現在60歳代半ば以上のクメール系住民の幼少時、即ち1950年頃までは、スリンの農村にはタイ政府の小学校は存在せず、男児のみが寺院でクメール語の読み書きを学んだという。しかし、今日では寺院でのクメール語教育は、消滅したようである。僻地にある前出ヒマワンバンポット寺の住職は、出家して10年になるが、出家当初でも寺では既に、クメール語は教えていなかったという。借り上げた車の運転手 Thamniam Bunchu 氏は、12-15歳の間、トーンユー和尚のサーラーローイ寺で沙弥に出家したが、その時には寺ではタイ語、パーリ語の他にクメール語も教えていた、しかし現在はクメール語および文字を教える寺はなくなった、と語った²⁷。これらの情報から考えると、20年ほど前に、寺院でのクメール語教育は消滅したようである。

東北タイでベトナム人が多いウドンなどの町では、ベトナムからのテレビ放送を大きなアンテナで受信して、ベトナム人家庭にケーブルで配信するビジネスが成り立っている。2003年8月に訪問したウドンの Talat Ha Yaek 繊維卸商市場の店々（殆どはベトナム人経営）では、ベトナム語テレビ放送をつけたまま商売をしていた。一方、スリンでは、カンボジアのテレビ局から受信できないだけでなく、

クメール語ケーブルテレビサービスも存在しない。東北タイのエスニック・クメールが接しているメディアは、タイ語ばかりなのである。

標準タイ語によるテレビ放送は、クメール語だけでなく、タイ各地の方言や少数民族たちの言語に壊滅的打撃を与えつつあるが、これに輪をかけているのは、タイにおける3歳からの幼児公教育の拡大である。民間経営の幼稚園・保育園の少なかったタイでは、少子化により余った公立小学校校舎を使って、小学校附属の公立幼稚園が容易かつ急速に普及した。スリンでも10年ほど前から公立小学校校舎を使って4年制の幼稚園教育（Boriban2年，Anuban2年）が開始された。公立幼稚園は、タイ語教育であるから、エスニック・クメールの子供たちも3歳くらいから一日の大半をタイ語の世界に浸って生きることとなったのである。

スリン市郊外にあるマハーチュラーロンコーン仏教大学スリン分校にカンボジアからの留学僧を訪ねた際に、同校近くの食堂で昼食をとった。母親が料理し、高校3年生のむすめが手伝っていた。この母子はクメール系だと判ったので、クメール語使用について尋ねてみた。母親は、自分も夫もエスニック・クメールで、2人の会話はクメール語である。しかしむすめはクメール語を聞けば判るが、話すことはできない、という。むすめによれば、それでもまだよい方で、高校の同級生のなかにはクメール系でありながら、クメール語を話すことはおろか、聞いても理解できない者もいる、そうである。母親は、最近の若い子はクメール語ができないが、バンコクの大学に進学すると、スリン出身というだけで、学生仲間からクメール語の歌を聞かせて欲しいとリクエストされることが多いので、むすめはこれから少しクメール語を覚えたいそうだと、屈託なく語った。吹通しの食堂の隣には、この母子の小綺麗で電化製品の完備した自宅が建っていた。スリン市に近く、ある程度の所得と教育のあるクメール系家庭の若い世代からは、話し言葉としてのクメール語も消滅しつつあるようである。

4. カンボジア人の対タイ・ベトナム態度

プノンペンでは、タイ大使館などの焼き討ち事件に発展した2003年1月29日の反タイ暴動まで、タイ語を夜教える私塾が、相当繁盛したようである。タイ語塾は1990年にカンボジアが開放経済に転じて後、タイからの投資が見込まれ、タイ語が判れば職が得やすいとの期待から、増大したようである。これは、現金収入につながる実学として英語学習熱が高いのと軌を一にした現象であろう。2003年12月に面接した早大アジア太平洋研究科志願者10名中、タイ語塾に学んだ経験を有するものは、3名であった。タイ語塾の生徒は、教師の家に謝礼金として毎日500リエル（約5バーツ、14円）をもって通い学ぶのが普通である。タイ語塾は、月謝ではなく日謝を徴収している。タイ語に限らず、他の外国語塾も日謝らしい。たとえば、日本語塾もあって、日本人とカンボジア人が一組で教えているが、その日謝も500リエルとのことであった。

3名がタイ語を学んだ期間は、3カ月間、1カ月間がそれぞれ1名。残る1人は、1週間の集中コースで学んだそうである。このような短期間の集中コースでも、日常会話はできるようになるという。クメール語とタイ語の語彙は、半分程度は重なっているようだし、文の構造も近いので、カンボジア人にとって、タイ語習得はクメール語にはない声調を除けば簡単なようだ。

ところが、12月に面接した者の話では、反タイ暴動以後、タイ語塾は殆ど消えてしまったという。テレビでのタイ製番組も同時になくなった由である。スリンで会ったカンボジア観光省の公務員 Ueh Un Phinisara 氏によれば、カンボジアのテレビ局中、2局はタイ人が経営している。2003年1月の反タイ暴動以前は、両テレビ局はタイ製テレビドラマとタイ製品の宣伝で人気があった。暴動後タイ製ドラマの放送はなくなったが、商品のPRは依然続いている²⁸、という。また、面接した1人の女性によると、彼女にタイ語を教えた先生（カンボジア人）は、反タイ暴動後、教える語学をタイ語から中国語に変えたという。なお、反タイ暴動後タイ語塾が衰退した理由は、単に反タイ感情の高まりだけではなく、期待したほどにはタイからの投資が増大しなかったことも、一因であると説明する者もいた。

クメール語とタイ語には、共通の単語が実に多い。クメール文字は読めないが、タイ語は判る者にとって、クメール語をローマ字表記した、David Smyth and Tran Kien 著 *Practical Cambodian Dictionary, English-Cambodian Cambodian-English*, Tuttle, Tokyo, 1995 は、便利な辞書である。このクメール語辞書には、クメール語とタイ語に共通の語彙が溢れている。因みに、同辞書の *Cambodian-English* 部分の第1ページ（同書の p. 133）に掲げられている、aで始まるクメール語22単語のうち、現在タイで使用しているタイ語と基本的に共通なものは、少なくとも14単語に上る。

現在、カンボジアは法律用語などをクメール語に訳出することに苦労しているらしい。上述のクメール語とタイ語の重なり合いの大きさを考えれば、タイ語から借用しさえすれば、容易に解決できるように思われる。最近のラオスは、高等教育でタイ語テキストを使用している²⁹が、そこまで行かずとも、既にタイ語に訳された概念をカンボジアでも採用すればよいのである。タイ語訳といっても、パーリ・サンスクリット語を基にした造語であり、これはクメール語で造語する場合も同様なのであるから。しかし、カンボジアの現状では、これは可能性が低い提案であるようだ。カンボジアに通じた一外交官によれば、カンボジア人のタイへの敵愾心³⁰は強く、タイから学ぼうという気持ちはなかなか生じない、という。更に、同氏によれば、カンボジアの学校では、アンコール時代の偉大な歴史ばかりを教え、タイの支配下にあったその後の時代のことは教えていないそうだ³¹。この点については、カンボジアの初等、中等の計12年生分の社会科教科書（地理・歴史も社会科教科書に含まれる）で、具体的に検証する価値があるだろう。

一方、ベトナム語学習について見れば、10名の面接対象者のうち、1980年代の高校生時代にベトナム語を学んだという者が2名いた。当時の高校では、ロシア語もしくはベトナム語のいずれかが選択必修科目であった。2003年12月にプノンペン―旧都ウドン往復に使った車の運転手によると、この時代は英語を勉強するとスパイと疑われ逮捕されたという。

1980年代にプノンペンの名門高校リセ・シソワットに学んだベキニーさんによれば、教師は生徒に選択希望を全く尋ねることなく、クラスの生徒を機械的に二分し、半分にロシア語、残り半分にベトナム語を割り振った。上からベトナム語学習を強制された生徒は、極力サボって、真面目に勉強する者はいなかった、という。

10名の面接者中2名は、国際関係の大学院を志願した理由として、カンボジアはベトナム、タイから領土を侵食され続けており、このようなことを防ぎ、現在係争中の領土をカンボジアが回復するために

国際関係・国際法を学びたいと述べた。

タイとの国境地帯には、タイが支配しているが、カンボジアは自国領土であると主張している地域が点在する。たとえば、前出スリン県ター・ミアン村のドンレーク山地の中の国境線近くにあるター・ムアン・トム遺跡を、カンボジア政府は一年前から自国領内にあると主張している。しかし、カンボジアの領土問題は、ベトナムとの間の方が、より深刻なようだ。その最たるものは、現在ベトナム領だが、クメール人が住むメコン河下流地域の帰属問題である。この地の回復は、シハヌーク、ポルポト、それに今日の人々に至るまで、カンボジア人の共通に願望のようである。彼らは、ヌオン・チア氏の発言として先に引用したように、メコン河下流のクメール人（クメールクロム）の愛国心を固く信じているようである。

1960年代、ホーチミンはシハヌークに、カンボジアが北ベトナムに協力すれば、ベトナム統一の暁には、クメールクロムの住む地を返還すると、口約束したと言われる。面接者の1人は、その口約束を実現させる方法を探すために、国際関係学を学びたいのだと語った。

結び

ストゥントレンのエスニック・ラーオ、スリンのエスニック・クメールは、自らの与り知らぬ国境画定により隣国の少数民族であることを余儀なくされた。彼らが、過去半世紀に辿った強制的あるいは自発的ナショナル化、すなわちラーオのクメール化、クメールのタイ化の実態を明らかにすること、および彼らの同化過程を両国の華僑のそれと比較することが、本稿の課題であった。

本稿では、2003年8月にカンボジアのストゥントレン、東北タイのスリンなどで実施した、寺院、末端行政機関、あるいは農村などでの聞き取り調査の成果、および同年12月にプノンペンで実施した青年男女への面接結果を資料として用いた。

カンボジアでは統計上、エスニック・ラーオはクメール人に分類されているので、ラーオ系人口の正確な把握は、不可能であると思われる。元来ラーオ人の居住地であったカンボジアのストゥントレン省に、クメール人の流入が増えたのは、1979年以降のことである。しかし、中央政府によるラーオ語教育禁止、言語統制政策の歴史はそれ以上に古く、カンボジアの独立直後の1956年に開始されている。中央政府は寺院における従来のラーオ語教育を禁止し、また公共の場所でのラーオ語使用に罰金を課して取り締まった。そのため、ラーオ語の読み書きができる者は現在50代後半以上の年配者に限られている。しかしラーオ語は、話し言葉として、農村のみならず、省の中心的な寺院でも、依然使用されている。最近のカンボジアでは中国語教育復活に見られるように、少数民族の言語教育も不可能ではないが、エスニック・ラーオには、そのような志向は見られない。むしろ、就職などの利便のために自らクメール語使用を選好している。また、ラオスに、親族がいる者は少なくなく、ラオスとの間には往来があるが、ラオス民族意識は見られないようである。

次に、東北タイ、スリンのエスニック・クメールに関して見てみる。彼らもタイ政府の分類では、エスニック・タイ (Chuachat Thai) に分類されているので、正確な人口把握は不可能である。スリン、ブリラムなどクメール人地域では、1930年代末からタイ語使用を強いる政策が開始された。それでも現

在 60 代半ば以上で農村に住むエスニック・クメールはタイ語を話すことができないばかりか聞いても理解できない。この世代の男性は、寺院でクメール語の読み書きを学んだ者が少なくない。しかし、寺院におけるクメール語教育は、スリン市の中心的な寺院はもちろん、かつてはクメール人だけから成っていた僻地農村の寺院でも、20 年以上前に消滅してしまっている。そのみならず、僻地の寺院でも、僧侶の説法は、主にタイ語で行われるまでになっている。

エスニック・クメールの現中年世代は、タイ語の公教育を受けている。彼らはすでにクメール語の読み書きはできない。読み書き言葉としてのクメール語は失われている。彼らの家庭では、一生タイ社会で生活することになる子女の利益を考え、子女に対しては努めてタイ語を使用している。加えて、クメール系の幼児も、公立幼稚園教育制度の整備普及に伴い、幼少の時からタイ語環境で生活する時間が、一日の相当部分を占めるようになってきている。そのため、若い世代からは話し言葉としても、クメール語は急速に失われつつある。この数年来、タイの大学では近隣国を対象とした地域研究が開始され、スリンやブリラムの師範大学ではクメール語も履修科目の一つとして扱われるようになってきている。しかし、クメール系の若い世代にとっては、大学で学ぶクメール語はもはや母語とは言えないだろう。

また、今日に至るまでカンボジアのクメール人との間には、頻繁な交流があるが、スリンなど東北タイのエスニック・クメールにはクメール人としてのアイデンティティは極めて希薄なようである。むしろ、彼らはカンボジアのクメール人を低く見て、同一視されることを好まない。

このようにカンボジアのラーオ人、東北タイ（イサーン）のクメール人はナショナル化の強大な潮流に呑み込まれて、抵抗するのではなく、逆に自ら求めてクメール化、あるいはタイ化を急いでいる。これは彼らに先立って、華僑がクメール化あるいはタイ化したのと類似のプロセスである。両国とも、外来の華僑が自らの言語を捨て現地社会に同化し、現地社会のエリート層・中間層を構成しているが、外来者ではなく原住民である少数民族も、華僑の同化と同じ形態で、固有の言語を自発的に捨てナショナル化しているのである。20 世紀後半のカンボジア、タイでは、ナショナル化が、エスニックグループの言語文化を呑み込み、エスニックな多様性は正に消滅の危機に瀕している。

注

1. 最近の拙稿としては、村嶋英治「タイ国の立憲革命期における文化とナショナリズム」、『岩波講座、東南アジア史第 7 巻』所収、2002 年、などがある。
2. 2003 年 8 月の調査は、筆者を代表者とする科学研究費による調査であった。この調査の成果として、本科学研究分担者菊池陽子「カンボジアのラーオ人」、東京外国語大学外国語学部東南アジア課程『東京外大 東南アジア学』第 9 巻（2004 年 3 月発行）、同伊藤友美「カンボジア仏教—二つの共産主義政権の経験と社会への関わり—」、神戸大学国際文化学部『国際文化学』第 10 号がある。カンボジアでのクメール語通訳は、研究協力者、ベキニー Ourn Pheakiny（当時早稲田大学大学院アジア太平洋研究科修士 2 年）さんの協力を得た。
3. 因みに、タイの仏教と比して、カンボジアでは次の違いが目にとまった。寺院の本堂建物の外側には二本の柱が立ち、先端には鳳（ホンサ）が飾られていること。仏像の両脇には二人の弟子が立っており、仏像にはイルミネーションを用いた後光が輝いていること。礼拝する人はタイのように五体投地はせず、座して頭を起こしたまま手だけを 3 度床に着けること。タイの仏教旗は、黄色地に法輪だが、カンボジアは 5 色と多色で幾何学模様であること。寺では線香・ロウソク・花の 3 点セットを販売しておらず、花なしで線香・ロウソクだけを上げることが多いこと。2003 年 8 月 18 日にプノンペンのウナロム寺で会った、カンボジア仏教を研究しているタイ人僧 Phra Raphin Duangloi 師によると、タイでは線香は仏、ロウソクは法、花は僧を象徴するものとされているが、カンボジアにはそのような考えはないという。同師によると、タイの僧侶の托鉢時間は、早

- 朝6時頃であるが、カンボジアの僧侶の托鉢の時間は午前9-10時頃と遅く、また、タイの仏像は、袈裟の外に乳頭が出ているが、カンボジアの仏像では隠れている。
4. 仏教のバンコク化あるいは中央化を示す面白い現象は、バンコク周辺のローカルな信仰対象であったはずのワット・ラカン寺の19世紀後半の高僧ソムデット・プラ・プットターチャン・トーの座像が、北タイや東北タイの寺でも祭られるようになっていることである。たとえば、東北タイ、ウボン県ピブーン郡の Wat Phukhaokaew 寺（2002年3月）、本稿でも取り上げているスリン県タートゥム郡の Wat Phraphutthabat 寺（2003年8月）あるいは寺名を失念したが、チェンマイの寺（1999年3月）などで筆者は、実際に目にした。なお、これらは、バンコクの金持ちの寄付によって建設されたことも考えられる。
 5. タイの華人については、村嶋英治「タイにおける華僑・華人問題」、『アジア太平洋討究』（早稲田大学）第4号（2002年3月刊、論説資料保存会『中国関係論説資料』第44号に再録）参照。
 6. スオン・チャはバッタンバン出身で1926年生。1942年-1950年に在タイ。バンコクで中学を卒業し、タマサート大学予科に学んだ。タイ共産党に加わり、同党の初期の青年活動家の一人。1950年にインドシナ共産党とタイ共産党との話し合いにより、カンボジアでの共産主義運動のために移籍した。現在パイリンに住む同氏との3時間に亘るタイ語インタビューの内容は別稿に譲る。
 7. ストゥントレンのラーオ人もラーオ語の名前を使っている。例えば、姓 Pan, 名は La という姓名をもつ父親の子供の姓名は、Pan Wathana, Pan Banchya, Pan Khamnuan などである。ラオスやタイでは名、姓の順序だが、カンボジアのラーオ人の名は姓、名の順序に逆転していることが判る。一方、タイ領スリンのエスニック・クメールの姓名は、名、姓の順でタイ式である。カンボジアのラーオ人と同様に、東北タイのクメール人も名前は一つである。タイ名とは別にクメール名をもっているわけではない。なお、東北タイやラオスのラーオ人はモチ米を常食し、カンボジアのクメール人はうるち米を食する。ストゥントレンのラーオ人たちも、昔はモチ米を食べたが、現在はうるち米しか植えていないとのことであった。一方、モチ米を食べるラーオ人に囲まれているスリンのクメール人は、うるち米を食している。
 8. Interview with Commune Head (Me Khum) Pan La, Khum Srah Russiy, Stung Treng Cambodia, 15 Aug. 2003.
 9. Interview with Mr. Tuy Hean, village head of Pum Spean Thamr, Stung Treng, 15 Aug. 2003. この村長(49歳)はクメール人で、1982年に川下のクラチエから来た。1982-96年の間は、小学校の教師。1997年に県知事から村長に任命された。彼の村はストゥントレン市の中にあり、人口は1700人。村民の殆どがラーオ系住民である。クメール系の成人で、この地で生まれた者はおらず、川下から移動して来た者ばかりであるという。
 10. ストゥントレンには、革命前も現在もトアンマユット派の寺院は存在したことがない。
 11. Interview with Maha Ma Lam Thon, Watt Sraskev Mounywann, Stung Treng, 14 Aug. 2003.
 12. 前掲, Interview with Commune Head (Me Khum) Pan La. Pan La 村長は、ラーオ語教育を6年受けた後、6年間クメール語教育を受けた。9年間僧侶(Khu Ba)に出家したのち、29歳でロンノル政権の兵士、ポルポト派の処刑リストに入っていたが、その前にベトナム軍により同地が解放され難を逃れた。1982-86年は、ストゥントレン省の商業事務所副所長。その後、副郡長を経験した。
 13. Interview with Phra Athikan Phut Analayo, Wat Himawanbanphot, Tha Miang, King Ampor Phanom Dongrak, Surin, 29 Aug. 2003.
 14. Interview with Pratheppanyamethi (Thongyu Yanawisuttho), Chaokhana Changwat Surin, Wat Salaloi, Surin, 29 Aug. 2003.
 15. Interview with Puth Ponn, Mekhun of Siem Reap Province Cambodia, 10 Aug. 2003.
 16. 但し、第三人(日本人を含む)は、1600バーツ(約4500円)を払って入国ビザを取得しなければならない。
 17. Interview with Nuon Chea, former Deputy Secretary General of Communist Party of Cambodia, Pailin Cambodia, 12 Aug. 2003.
 18. ラーチャ・シンコン寺は今日でもバンコクにおけるクメール僧の拠点の一つである。So Rot 副住職も呪力に優れた僧として名声がある。彼の部屋には多数の人が参詣・寄進に押しかけ、彼から呪力ある金粉を貰い頭や財布に付けている。なお、タイ人の多くは、呪力に優れた僧侶をゲジャーチャー(Keji Ajarn)と称して信仰している。タイ人はクメール僧には、呪力に優れた者が多いと信じている。
 19. *Gan phukphatthasima pitthong fang luknimit Wat Phraphutthabat Phanomdin Tambol Thatum Amper Thatum Changwat Surin*, 7 April 2001.
 20. 同大学は、タイ政府の奨学金を得たラオスからの留学生の受け入れも、2002年に開始した。2003年8月現在、8名のラオス留学生が学んでいる。
 21. Interview with Mr. Ueh Un Phinisara, Rajabhat Surin, Surin Thailand, 29 Aug. 2003.
 22. ブリラム県のエスニック・クメールの割合は県人口の60%と言われる。同大学には、1992年に Khmer Stu-

dies Center が設立されている。同センターの出発点は、1985年に国境地帯のカンボジア難民キャンプで、同大学の7名の教員が、難民を対象とした教師育成プロジェクトに参加したことに始まる。難民に接して現代カンボジア語を身につけた教員たちは、その後米国、日本（日教組）などのNGOあるいはタイ政府のカンボジア援助プロジェクトの委託を受けて、難民キャンプ、同大学さらにはカンボジア国内で教員養成のためのトレーニングを今日まで続けている。同大における標準クメール語教育の始まりは、1991年と92年に実施した課程外コースである。更に、2001年には人文・社会科学部タイ語専攻にクメール語副専攻が置かれ、クメール語は大学の正規科目となったのである。(Sommair Chinnak, *Indochinese Studies: Organizations and Activities in Thailand*, Thailand Research Fund, 5 Area Studies Project, Bangkok, 2002, pp. 156-164. (in Thai))

23. 前掲 Interview with Pratheppanyamethi (Thongyu Yanawisuttho), Chaokhana Changwat Surin.
24. トーンユエ和尚の話では、ポルポト派健在の時代は、タイ側のクメール系住民の中には、カンボジア内に住む共産主義派の親族を支援した者がいた。また赤化した民衆を支援した僧侶が共産主義者だと疑われ非難されたこともある。当時は、タイ政府の官吏が、僧侶に対しても共産主義について説明し、騙されないようにと注意を促していた（前掲, Interview with Pratheppanyamethi (Thongyu Yanawisuttho), Chaokhana Changwat Surin).
25. 村嶋英治「タイ国の立憲革命期における文化とナショナリズム」、『岩波講座 東南アジア史第7巻』所収、2002年、pp. 254-255 参照。なお、ラッタニヨム運動がクメール系住民の言語の変化に、どのような影響を与えたか、本格的オーラルヒストリー調査が望まれる。
26. 修士論文を書くために、クメール系の農村で調査した Ueh Un Phinisara 氏も、65歳以上のクメール系農民はタイ語ができない、と語った（前掲, Interview with Mr. Ueh Un Phinisara.）。
27. 前掲, Interview with Phra athikan Phut Analayo. なお、借り上げた車の運転手（34歳）は、12-15歳の間、トーンユエ和尚のサーラーローイ寺で沙弥に出家したが、その時には寺ではタイ語、パーリ語の他にクメール語も教えていた、しかし現在はクメール語および同文字を教える寺はなくなった、と話した。トーンユエ和尚は、クメール（コム）文字を読むことができる。インド留学中に日本人の学問僧に頼まれて、クメール文字で書かれた貝葉文書を読んで助けた経験も有する。和尚がクメール文字を学んだのは、バンコクのマハーチュラーロンコーン仏教大学（マハーニカーイ派）本校に於てである。同大学では30年ほど前まではクメール文字を教えていたという（前掲, Interview with Pratheppanyamethi (Thongyu Yanawisuttho), Chaokhana Changwat Surin).
28. 前掲, Interview with Mr. Ueh Un Phinisara.
29. 村嶋英治「ラオス社会の変貌と教育・仏教の現状—7回目のラオス訪問記」、『アジア太平洋討究』第5号、2003年3月、参照。
30. 在タイ歴8年の Ueh Un Phinisara 氏は、タイはカンボジアの内戦時代、本来カンボジアに与えられた海外からの援助を横取りして発展した、例えば、国際NGOのカンボジアへの援助の30%はタイ人の手に落ち、中国からのクメール・ルージュへの武器援助の7割はタイ軍の手に落ちた、と息巻いていた。真偽は別として、この発言からカンボジア人の対タイ観を窺うことは可能であろう。
31. プノンペンの王宮の隣に位置するエメラルド寺の出口（公設土産物店の前）には、ジャヤバルマン7世像が置かれ、その背後に12-13世紀のクメール帝国の版図が描かれている。この地図にはタイやシャムという名称は一切なく、現在のタイ国の部分は完全にクメール帝国に色分けされている。ここは、王宮を訪れた観光客が必ず通過しなければならない場所に当たる。同種の地図は、プノンペン国立博物館にも掲げられている。これらの刺激的な地図を目にしたタイ人観光客は少なからず反感を覚えるものと思われる。